

< ただ急げる >

4月28日(土)

元日の年賀状に戦慄が走った。広島の人M。不良性リンパ腫を患い療養中で、4月に復帰予定とのことだ。

6年前、同じ病気で同級生を亡くしている。お子さんを塾で預かっている最中だった。悲しい記憶が、まだ新しい。

見舞いに行かねばならない。だが、「そんなに心配は要らない。ついでの時でもいいから、遊びに来いよ」と電話での返答だった。一安心である。

とは言っても、こうと思ったら矢も楯もたまらない性分だ。早速、今春のジャーニーに組み入れることにした。見舞いがてらのジャーニーか、ジャーニーがてらの見舞いか。どちらでよろし。会って、元気な姿を一目見たい。

取って置きのコースが残っている。スマイルラン山陽道の東広島～広島45kmが、ポッカリ空いていたのだ。

三原から廿日市に向かう途中、東広島で突然荒天に見舞われた。突風が吹き荒れ、雹が落ちて来たのだ。10月中旬なのに急激に気温が下がり、防寒装備を持たない私は、身体ブルブル、歯ガチガチとなった。継続不可能と判断したコースディレクターが、ストップをかけたのである。

いつかカバーに行こう、行ってMに会おう、とは思っていたのだが、その機がこんな形でやって来ようとは。天の計らいだろうか。

忘れもしない41年前の春、私はMと出会った。アメリカンフットボールに憧れて入った大学だ。当時にしては体のデカかった私は、入学式の日、即、スカウトの勧誘を受けた。「抜群のライン候補がおったで」と言われていたと、後で父から聞かされた。

翌日、練習見学と入部手続きをしにグラウンドへ行く途中、Mはいたのだ。ある同好会の呼び込みをやっていたところだった。

「君、ちょっと話を聴いてくれへんか」と馴れ馴れしく話しかけてくる。上級生っぽい語り口だったので、無下に断り切れず、ちょっと耳を傾けることにした。

「何に入るか決めとんの？その体格からすると、アメフットやろ」「どうして分るんですか」「その体を、放っておけへんわ。ラインを探しとんねん」「ラインって何ですか」。

悲しいかな、田舎者の私が知っていたアメフットのポジションは、クォーターバック、ワイドレシーバー、ランニングバックだけだった。やりたいと思うには、あまりにもお粗末な知識だった。大分のテレビで放映されていたのは、甲子園ボウルだけだったのである。

ラインには、オフENSEラインとディフェンスラインがあり、前者は、ただクォーターバックを守るだけとの説明を受けた私が、「レシーバーをやりたいんですが」と言うと、「あか

ん、あかん。高等部から上がって来た優秀な奴等がおるんや。未経験者にはでけへんわ。それに、三部練があるから授業に出られへんよ」。また、初耳言葉だ。「三部練って何ですか」「朝、午後、晩、一日3回の練習」。ゲッ! 何それ、留年するじゃねえか。

すっかり話に取り込まれた私は、そこまで詳しいのは上級生に違いないと思い、「失礼ですが、何年生ですか」と問うと、「一回生や」と返って来た。これにはビククラ仰天したものだ。

彼は広島県の倉橋島の出身で、広島大学に受かっているのに、それを蹴ってこの私学に入って来たそうだ。田舎田舎と言いたくないが、田舎では国立崇拜主義で、広大に行かずに私大に来るなんてのは、言語道断的行為だったのである。しら真剣勉強して、やっと入学できた私の立場はどうなるのだ。「スゲエな! こいつ」、と先ず一発目の畏敬だった。

次に、「入学したばかりなのに、どうしてアメフット部のことがそんなに詳しいのか」と訊くと、「4月初めからS寮に入寮し、先輩から仕入れた知識や。アメフット部はこの大学の看板やから知っとかんと」だった。啞然! なんちゅう心掛け。それに、S寮というのはおいそれと入れる寮ではない。入寮試験があり、競争率は5倍を超えると言う。「賢過ぎるで! こいつ」と二発目の畏敬だった。

三発目は、「〇〇会社に入るには、広大よりもここの方が有利」と聞いた時である。大学なんて、キャンパスや部、あるいは知名度で選ぶものとばかり信じていた私は、「18歳でそこまで考えているとは…」と度肝を抜かれた。自分がいかに田舎のガキであったかを、思い知らされたのだった。

結局、私は練習見学に行ったものの、入部は思い留まった。ヘッドコーチから、「自分には《関西では相手のことをこう言う》、ラインしかない」と言われたのと、やるなら留年覚悟と知らされたからだった。更に、グラウンドのサイドラインには、故障者が大勢いたのである。松葉づえを突いた人やギブスをはめた人がゴロゴロ。18歳の無垢な少年を怖気づかせるには、十分過ぎる風景だった。今の様にアメフットの知識があれば、何としてでもラインメンを希望していたのに。我が青春の、一番の悔いかもしれない。

ともあれ、私はMの所に戻り、その同好会に入った。体をチャンと鍛えて、大学生活を送ろうと思ったのだ。それに、Mとつき合ってみたかった。

その後、彼は半年で同好会を去り、準硬式野球部に入った。私だけが、取り残された感じだった。

2年の春、突然彼が、「前田よ、準硬に入ってくれへんか」と言ってきた。故障者が続出し、試合ができない状態らしい。同好会も一年やって体ができたし、そろそろ潮時かな、と思っていたところだった。高校卒業時に、肩を完全に潰していたので多少の不安はあったが、準硬ならなんとかなるだろうと、二つ返事で引き受けた。

ところがどっこい、これは彼の策略だったのである。私が入部すると、彼はサッサと退部してしまったのだ。辞める時は替わりが必要、という部のしきたりがあったからだった。確かに人数は少ないが、試合ができないほどではなかった。

嵌められたと分っても、別に腹は立たなかった。練習から試合まで上級生が取り仕切る(監督と顧問は形だけ)という野球は、高校まで、指導者任せの野球しか知らなかった私に

は、斬新でならなかった。自主かつ自己規制。「これが、俺が求めていたものだったんだ」と、むしろ M に感謝したい気持ちだった。残りの 3 年間をこの部に身を捧げ、3 年の春キャンプを佐伯市でやる程の、のめり込み様だった。彼から譲り受けたグローブをずっと使い、充実した学生生活を送ることができたのだ。

あの時、彼に出会わず、訳も解らないままアメフト部に入っていたら、私の人生はどうなっていたのだろうか。少なくとも、ジャーニーランは無い。体格的に超長距離は無理だ。

生活面でも、M なしでは 4 年間で語れない。

金銭面で全く計画性のなかった私は、月の中頃になると、懐具合が淋しくなって仕方なかった。仕送りは月初めにあるのだが、一挙に贅沢をするのだ。下旬になると、財布の中には 1000 円も入っていない日が多かった。昼飯は、学食でライスと福神漬だけで済まし、アパートに帰ると、インスタントラーメンとフランスパンのみ、という生活を 1 週間ほど続けるのが常だった。

そういう時、M は実に頼りになる奴だった。二進も三進もいなくなると、彼の元へ走るのだ。歩のいいアルバイトをしていた彼は、いつも金を持っており、快く貸してくれた。

ある時は、「寮食はマズいけえ、これをおまえにやるわ」と言って、食券をどっさりくれたこともあった。食券さえあれば、誰でも利用できるシステムである。

ご飯とみそ汁おかわり自由、という寮食は、質より量の私には、何よりのご馳走だった。煮物、揚げ物中心のおかずも、全然不味くはなかった。涙が出るほど嬉しかったことを覚えている。

借りてばかりでは悪いので、体力任せの深夜アルバイトで稼いだ時は、必ず大判振る舞いをやった。大概、寿司屋か焼肉屋だった。その位でしか、お返しする術がなかったのだ。

度々言うが、M がいなくなったら、私はどうなっていたのだろうか。とんと、思いつかない。

私の人生に、これだけ深く関わった奴だ。まだ、死なす訳にはいかない。早く会わなければ、と気は急ぐばかりだった。

以上のことが走馬灯のように頭をよぎり、新幹線東広島駅を 8:40 にスタートした。一つ深呼吸をし、「さあ、行くぞ。待ちよれよ」と気合を入れる。目指すは、東横イン広島新幹線口だ。15:00 到着、17:00 待ち合わせ予定。

駅を出ると、上三永交差点に向かった。スマイルランの中断地点だ。それから、2 号線を 5km ほど戻り、右折した。前方の西条バイパスは、人は通れない。西条市街を迂回せざるをえない。

10 時の方向 3km に広島大学があるはずだ。我が塾生も何人かは来ている。異口同音に、「寒くて不便」と言う。広島大学は、医学部以外、広島にはないのだ。評判はいいが、4 年間ここで暮さなければいけないなんて、可哀そう過ぎる。広島まで、電車で 40 分もかかる。

西条の街を抜け際に、また悪い癖のショートカット。絶対にこの道、と自信をもって進んで行ったら、バイパスにぶつかった。方向が、全く違っていた。くそ大回りになる。やむを得ず、バイパス沿いの農道を通して、八本松で 2 号線復帰した。

2 号線は、八本松を過ぎると、海田まで 20km ほど下っている。これも、歩道が無いところが多く、路肩には、ビンの破片、ヒシャげた空き缶、タバコの吸い殻等が散乱している。

加えて、交通量が半端ではなく、劣悪道路だ。気分が甚だしく悪い。堪らなくなり、瀬野という所で瀬野川の対岸に渡った。

住宅街路で、多少のアップダウンはあるが、車が少なく走りやすい。お好み焼屋があちこちにあり、いい匂いを漂わせていた。時刻は12:00を回り、寄って行ってもいいのだが、ジャーニー中の昼食はバーオンリー主義なので、グッとこらえた。

代わりに公園のベンチに腰を下ろし、一本満足イチゴ味とカレーバーを食べた。目の前のお好み焼屋の匂いを堪能しながら、粹な昼飯となった。ハハハ、痩せ我慢はつらいね。

こういう風に所々で休憩して行かないと、チェックインタイムの前に着いてしまう。斎藤茂吉の歌集「赤光」の「死にたまふ母」中に、「みちのくの 母のいのちを 一目見ん 一目みんとぞ ただ急げる」という歌があるが、今日のランは正にそれだ。「Mの姿を 一目見ん 一目みんとぞ ただ急げる」と変えようか。抑えきれない！この逸る脚。

東横インのチェックインタイムは、普通なら16:00だが、クラブ会員であれば15:00だ。調整を重ねて、その15:00オンタイムに到着した。

ルーティーンをこなす間に、500m缶を2本飲った。気の高ぶりを静めなくてはならない。

アッという間に17:00になった。恐る恐るロビーへ下りる。いた!! Mだ。5m向こう、背をこちらにして新聞を読んでいる。「おい、M」と声をかけると、こちらを振り向いた。何も変わっていない細面。私は、放射線治療で削げ落ちた顔を想像していたのだ。

駆け寄って、手を握り肩を叩いて、「元気やったんやな？」と言うと、「心配かけたな、済まない」と返す。その一言で、私の堰は切れた。辺り憚らず、「よかった、よかった」としゃくり上げたのだった。

昔から、そういう奴だった。人の気持ちを汲み取り、気を配る。私には過ぎる友。有り難き運命に感謝しなければ。

そのあとは、彼の馴染みの居酒屋に行き、昔話に花を咲かせた。病気は、一先ず大丈夫だが、再発率は0%ではないそうだ。完全ということはないらしい。

残念ながら、彼が、門限20:00と自己規制をかけているので長居はできなかったが、旅の目的は十分達成した。大満足だ。路面電車に乗り込む彼を見送り、私は踵を返した。

と、ここで大人しくホテルに帰れば、万事めでたしなのだが、そんなん、あるワケがありゃあしない。飲み足らなさを補うために、ホテル近くの小さな居酒屋に足を運び、独り二次会を開くことにした。ホッとしたのだろう、アルコールがガンガン体に入っていく、'12春のジャーニー無事終了を祝った。午前様直前まで、居座ってしまったのである。

やっぱり、私は、こういう奴だったのか。